

東北次世代がんプロ養成プラン セミナー実施報告書

(セミナー名称)	
東北大学大学院医学系研究科がん看護学分野主催 5月がん看護勉強会	
事例報告者 : 尾辻 美沙	
所属 : 東北大学大学院がん看護学分野	
テーマ : NICU で出会ったがんを抱えた母親の事例から AYA 世代のがん患者の看護について考える	
担当者氏名 : 佐藤 富美子 教授	所属 : 東北大学大学院がん看護学分野
内線 : 7926	Email: fsato@med.tohoku.ac.jp
1. 実施年月日 :	
平成 31 年 5 月 20 日 (月)	
2. 開催場所 :	
東北大学医学部保健学科D棟 217 号室 がん看護学分野カンファレンス室	
3. 関連分野 :	
AYA 世代、母性看護、がん看護	
4. 対象者 :	
がん看護に興味関心のある医療関係者・大学教員・東北大学大学院医学系研究科保健学専攻学生・東北大学医学部保健学科学生	
5. 参加人数 : (お分かりの範囲で内訳をお知らせください。教員、学生など)	
大学教員 3 名、大学院生 5 名、医療関係者 1 名、学部学生 2 名 計 11 名	
6. 成果 :	
<p>この度の事例報告は、がん治療期にある母親役割取得に対する看護ケアの検討についてである。</p> <p>組織背景として、東北大学病院の NICU に児を持つ母親の特徴として、心疾患、免疫疾患、がん、精神疾患に罹患している者が多い。母子の発達を促進するケアとして、母乳育児、タッチング、沐浴などを含んだファミリーケアを行っている。がん罹患した母親は 3 例/年であった。</p> <p>事例は、妊娠 16 週に子宮頸癌 I B 1 期の診断を受け、妊娠 28 週で計画分娩した 30 代後半の母親である。出産後、児は NICU に入院し、事例は化学療法と放射線療法を開始した。事例は治療を受けながら、毎日 NICU に児に会いに来る様子がみられ、看護師などの医療従事者との関係も良好だった。児の退院時期に、事例は外来放射線治療に移行することが決定した。NICU 看護師は、退院後に治療を受けながらの育児は、事例にとって負担が大きいと考え、祖父母を含めた退院支援を計画した。しかし、その提案時より、事例の表情は曇り、看護師へ距離をとるようになった。担当看護師は、事例にとって子育てが希望であること、夫と二人でやっていきたいと考えていることの意味を確認し、尊重してケアを行うようになり、患者との関係性は回復した。組織では、この事例を元に、事例の病棟とも情報共有していく必要性和段階的・個別的なケアを行うことを改めて共有した。</p> <p>以上の報告を基に、AYA 世代でがん治療期にある母親に対する看護援助についてディスカッションを行った。報告を受けた事例の課題は、NICU 看護師は治療期の患者負担を軽減するために、ソーシャルサポートの強化として祖父母のサポートを提案した善行の原則に対して、自律して育児をしたいと考えていた事例の意志が未確認のままに、提案されたことにより、自律尊重の原則が脅かされた点である。治療期にある対象者であっても、母親としての成長を確立していけることができるように、まずは患者の希望を尊重したケア計画が必要である。さらに、NICU と母がケアを受ける場の、それぞれの組織が協働して、</p>	

患者の自律性を尊重した看護に関わることができるシームレスな環境づくりの重要性について共有した。

次回は、引き続き第2報として事例報告を受け、がんに罹患した母親に対する看護について考察を深めていく。

【当日の会場の様子などの写真がございましたら、添付ください】

